

英語教育と国際理解教育・異文化間コミュニケーション

米田 尚美

岐阜聖徳学園大学教育学部非常勤講師

English education, international understanding education, and intercultural communication

Naomi YONEDA

キーワード：コミュニケーション能力 国際理解 異文化理解 英語教育

I. はじめに

1. 実践研究の背景と目的

学校現場においては、不登校やいじめが問題になってすでに随分年月が経つが、なかなかこの問題については解決の糸口が見えていない状態である。文部科学省の「不登校児童生徒への支援に関する最終報告¹⁾」によると、小・中学校で児童生徒が不登校となったきっかけと考えられる理由は「友人関係を巡る問題」がトップであり、コミュニケーション能力不足がその一因と考えられる。また、経団連が2016年に発表した「新卒採用に関するアンケート調査²⁾」によると、企業が学生の選考にあたって最も重視した点は、13年連続で「コミュニケーション能力」となっており、コミュニケーション能力不足は就職活動にも影響し、その人の人生にも大きくかかわってくるということである。これは社会人を目前にした大学生にとっては切実な問題である。

また英語教育においては2020年の東京オリンピック・パラリンピックを見据え、新たな抜本的な充実が図られようとしている。「グローバル化に対応した英語教育改革計画³⁾」に基づき体制整備等を含め、2014年度から改革が推進されており、小・中・高を通じて一貫した学習到達目標が設定され、英語によるコミュニケーション能力を確実に養うようグローバル化に対応した新たな英語教育の在り方が示されている。

大学卒業後、学生が教師となり児童や生徒と接する際には、円滑なコミュニケーションを図ることは大変重要である。学生自身が教育現場に立つ前に、人権教育に資する国際理解や異文化理解を深める活動を体験することは、教師としての資質向上につながり、今後の人生に大変役立つに違いない。

さらに2020年より小学校で英語科が教科となるのを見据え、英語教育と国際理解教育・異文化間コミュニケーションを関連づけた活動について考察する。

2. 国際理解教育・異文化間コミュニケーション

国際連合の専門機関であるユネスコは、国際理解教育の中心目標を「人権教育」を基盤とし、「国際理解と国際協力」の態度の育成を掲げている。具体的には、生命に対する畏敬の念と基本的人権の尊重、異文化に対する理解と尊重、自国の文化の理解と尊重、意思の疎通を図るコミュニケーション能力の育成、自国の利益のみにとらわれずグローバルな視点を持つこと、共生の認識の育成などについて述べており⁴⁾、このユネスコの国際理解教育の理念は我が国の教育にも生かされている。

国際理解とは、国際社会を構成する国民・民族が個人および国家の協力・協調の関係を築くため、国民・民族の個人の生活と文化の様式や体系、実態などを相互に理解し合うことである。しかし一般的に「国際理解」ということばは「国際」という用語が「国家間」を意味し、「国内」を含まないと捉えられるため、私たち日本人は国内の異文化の存在を認識しないで、外国の異文化のみに目を向けているという現状がある。同じ日本人であっても文化背景は同じではない。男女間、世代間、地域間など、私たちの日常生活におけるコミュニケーションのほとんどが異文化間コミュニケーションであると言える。

コミュニケーションとは、自分自身の内部体験や外界からのさまざまな刺激に対して自分なりの意味を見いだそうとして努力する創造的なプロセスである。一般的には、対人コミュニケーションを意味し、意味づけしたこと（内部状態）を他の人と共有し分かち合おうと努力するプロセスを言う。またコミュニケーションとは、2人以上の人が言葉を使って意思の疎通を行う対人コミュニケーションだけでなく、個人の内部で起きている心の動きなどの自己内コミュニケーションをも含む。送られたメッセージはコミュニケーションに参加するすべての人によって、様々な意味づけ（解釈）がなされる。つまり、メッセージの送り手（話し手）が何を言ったかということではなく、そのことに対して「他人が与える意味」とその意味付けをする「行動の認知者」の役割が重要になる⁵⁾。

コミュニケーションの「意味づけ」のきっかけになるものは言葉だけではない。相手の視線、表情、声のトーン、ジェスチャー、手の動き、対人距離、身に付けているものなど、言葉以外のシンボルである非言語コミュニケーションが大きな部分を占めている。非言語コミュニケーションの研究者ハードウィスタイルによると、「個人間コミュニケーションにおいては、言語によるコミュニケーションは35%にすぎず、残りの65%は非言語コミュニケーションによるものである⁶⁾」と分析されている。

このように人間の五感を通して感知できるものはすべてコミュニケーションの対象になる。「知覚され、解釈されたものがすべて伝わる」という見解に立てば、私たちは生きている限り、コミュニケーションから逃れないことになる。

コミュニケーション能力とは、ことばだけではなく、様々な方法で相手と意思を伝達し合う技術であり、自分の意思を思い通りに伝えられることも大切であるが、最近は相手の気持ちや周囲の状況を読み取る能力の方が重要視される。自分ではコミュニケーションをとっているつもりなのに、なぜか周囲から疎まれるという人は、自分の意思を一方向的に伝えている可能性が高いと考えられる。近年の子どもたちは携帯電話やパソコン、ゲームなどに費やす時間が多くなり、人と直接話す機会が激減しているのが要因と考えられるが、そのような児童・生徒・学生を取り巻く環境について留意すると共に、学校教育現場におけるコミュニケーション能力の育成が必要である。

異文化間コミュニケーションは、文化背景の異なる人への開かれた心と態度、そして、コミュニケーション活動への積極的な参加行動が基礎になっている。このような態度・姿勢は幼い時期から養うことが重要であるが、場合によっては大人になってからでも環境によっては不可能ではない。それは近い将来、教員となる学生が身に付けておくべき大切な要素であると考えられる。

3. 国際理解教育・異文化教育と英語教育との関連付け

我が国の国際理解教育と英語教育との関連付けについては、小学校において長年、研究と実践を重ねてきたという経緯がある。

2002年より開始された「総合的な学習の時間」が2011年の学習指導要領改訂により5・6年生において「外国語活動」が新設され、小学校における外国語教育は20年に及ぶ検討を度重ねて、ようやく必須化の運びとなり、そしてついに2020年には教科化される。

「総合的な学習の時間」が全国の公立小学校で実施され、小学校においては国際理解に関する学習の一環としての英語活動を行うことが認められるようになった時点では教科ではなく、英語活動を国際理解教育の一環であると位置付けられていた⁷⁾。また現場では、国際理解と英語活動との関連付けの方法など、何をどう教えればよいのかという疑問や不安があり、様々な問題が山積していた。

松川（2003）は、研究開発学校での試行から理解できたこととして、「小学校での英語活動の教育内容としての新しさは、子どもと教師が共に、外国語や外国人という未知の世界との出会いを重ねることにある⁸⁾」と述べている。英語を使って外国の人と共に遊び、何かを一緒に行ったという経験を重ねることと、その先に、異なる言語、異なる文化を超えて、人間として共通に体験できる何かがあり、喜びがあるという教育的体験の創造が小学校英語活動では重要なのである。

これは「地球人」としての自覚であり、当時の小学校における国際理解教育の一環としての英語活動は、基礎感覚的な能力の育成を目指していたということである。小学校教育はまさにこれらの基本を培うためにある。もちろん学校の教育活動全体を通して学んでいくわけであるが、異文化に触れさせることで、児童の意識が強く刺激されて興味・関心が広がり、学習がより深まっていくことが期待される。こうした「地球人としての基礎作り」は、新しい小学校教育の枠組み作りの中で、国際化に対応するた

めに英語教育の導入を考える立場であると考えられる。小学校においては、おおよそ担任がほとんどの授業を行うことで教科を超えた横断的な取り扱いが可能であることも利点と考えられる。

また、中学校や高等学校においては英語科や社会科の授業の中で、国際理解や異文化理解の取り扱いがあるが、特に英語科での取り扱いがほとんどであり、教科書の内容として国際理解・異文化間コミュニケーションに関するものが多く取り扱われている。

小・中・高に一貫して、国際理解・異文化理解を英語教育のねらいとして定め、英語教育と国際理解・異文化理解を関連付けた内容を取り入れることが、コミュニケーション能力育成につながるのではないかと考える。

II. 実践研究の方法

～国際理解・異文化間コミュニケーションとの関連を考慮した活動プラン～

国際理解や異文化理解と英語活動を組み合わせた内容といえば、一般的には世界の国の文化などに関する知識を得ると同時に英語の語彙や表現に触れるなどの活動がよく見受けられる。そのような知識を得る活動だけではなく、本来の国際理解のねらいを踏まえ、なおかつ英語活動につながる学習内容を国際理解教育の根幹である人権教育のための活動や異文化間コミュニケーション活動を実施することが教師としての資質向上につながると考える。

本研究では2008年より愛知教育大学の免許更新講習と岐阜聖徳学園大学教育学部の英語コミュニケーションⅡの授業において実施している実践活動2種類について紹介し考察する。

英語を使用してコミュニケーションを図りながら、国際理解・異文化理解を促す活動を岐阜聖徳学園大学にて30名前後の学生を対象に毎年2クラスにおいて実施している。また、愛知教育大学の教員免許更新講習においても、30～40人の小学校～高等学校の教員を対象に同様の活動を行っている。

III. 実践内容

(1) 活動例1：「みんなで協力して顔を完成させよう！」

①準備する教材

- ・世界地図
- ・国旗カード
- ・世界の子どもの顔ジグソーパズル⁹⁾(図1)

様々な国の子どもの顔のパズルをグループの数だけ作る。

同数の封筒を用意し、全てのパズルを混ぜてバラバラにしたピースを適当な数で入れる。あえて同じ数にしないで、ピースが多い封筒もあれば、少ない封筒もあるようにする。鼻が2つあったり、口が入っていなかったり、封筒の中身は様々。



図1 世界の子どもたちの顔パズル

②活動内容

- 1) 世界の国の挨拶、国名を世界地図や国旗のカードなどを使用して導入する。世界には様々な目の色、髪の色、肌の色の人たちがおり、それぞれの文化をもち、衣食住・生活習慣なども異なるということや様々な言語を話しているということを確認する。現在、世界中では様々な言葉が話されているが、母語以外に英語も話せるという人々が多いため、英語も話せると様々な国の人たちと関わるこ

とができることを認識する。

- 2) 活動で使用する英語の表現についての口頭練習を行う。児童・生徒・学生の持ち物などを使って、ペアで口頭練習させる。英語の表現の仕方を忘れてしまった場合には、手振り身振りで何とか伝えればよいことを話しておく。

We need this./May I have this?/Would you like this?/Yes./No./Here you are.

- 3) グループに封筒を一つずつ配り、皆で協力してジグソーパズルを完成させるよう指示する。袋の中には、様々な人種の子どもの顔のジグソーパズルが入っている。但し、その袋の中に入っているピースだけではひとつの顔を完成させる事は不可能であり、わざと様々な人種の顔のパーツが混ぜてある。また、袋の中に入っているパーツの数は均一ではなく、グループによって多かったり、少なかったりする。
- 4) グループごとに各国の子どもの顔のジグソーパズルのパーツを組み合わせて顔を完成させる。その際、前述2)で口頭練習したセンテンスなどを使用しながら、パズルの完成を目指す。他のグループとパーツを交換したり、あげたりしてもかまわない。細かいルールは事前に説明せず、自分たちで気付いて協力して完成する中で、相互依存を理解する。
- 5) それぞれ完成した世界の子どもの顔を見せ合い、その国の名前やあいさつの仕方を発表する。
- 6) 活動が終了したら、それぞれのグループが1つ1つの国家であり、そして顔のパーツはその国の資源と考えさせてみる。すなわち言い争いは戦争であり、他グループへの働きかけは交渉であり、手助けは国際協力といえる。もともと資源が少ない国もあれば、多い国もある。果たして自分達の行動は正しかったのか？自分達のグループだけが完成させたら、知らん顔ではなく、全てのグループが顔を完成させるために協力できたか？など振り返ってみる。具体的にグループ内のそれぞれの学生の役割、グループ間で衝突なく、仲良く交換するなど調整しながら進められたかどうかなど、活動の振り返りを行う。このような学生の行動を客観的に観察することが大きな意味をもつため、予め活動の様子をVTRに撮っておき、後で振り返ってみてもよい。

(2) 活動例2：寛容性を育むアクティビティ ～人間はみんなちがっている（私のみかん）～

異質なものへの「寛容性を育むキーコンセプト」に気づくことのできる活動を行う。この活動を通して、「人間はそれぞれユニーク(唯一)な存在で、世界の人々はみんな異なっていること、みんな異なった存在だが、人間としての思いは同じであること、“ちがいが”を認めてこれを受け入れ、多様な文化や生き方を尊重することは、私たちの生活を変化に富んだ、豊かなものにしてくれる¹⁰⁾」ということを学ぶことができる。

①準備する教材

- ・みかん人数分
- ・画用紙(中学年以下の場合)

②活動内容

- 1) 状態を表す形容詞やこの後の活動に使用する英語の表現を導入し、口頭練習しておく。その際に学年に合わせた語彙・表現を選ぶ。小学生の児童の場合は簡単に“It’s mine.” “It’s not mine.”だけでよい。中学生・高校生・大学生などの生徒・学生は既習の表現や単語を使用して表現させる。
形容詞: big-little, heavy-light, dark-light, rough-smooth, oval, round, flat
名詞: calyx (へた), bruise [キズ]
表現: This is my orange. It is big and heavy. It is dark orange.
It’s mine. It’s not mine. It’s not yours. Is this yours? など。
- 2) 1人に1つずつみかんを配り、よく観察させる。その特徴をグループ内のメンバーに報告・紹介させる。絵を描かせてもよいし、日本語や英語で書かせてもよい。(図2)
(給食のみかんを利用したり、自宅のジャガイモを持参させたり、殻付きの落花生などを使用するとよい)

- 3) グループの全員のみかんを混ぜ合わせて、「自分のみかん」を見つける。
 It's mine./It's not yours./Is this yours?/Yes, it's mine./
 Because my orange is big and heavy./The color is dark orange./
- 4) さらに2グループ、3グループ全員分のみかんを混ぜて合わせて行うなど、より多くの人数で同様の活動を行う。1クラス全員で行うことも可能。

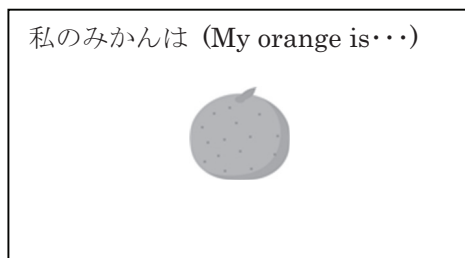


図2 「わたしのみかん」のイラスト

IV. 考察・分析

活動例1においては、相互依存関係について認識し、お互いが必要とするものを融通し合い、協力することによって、それぞれが満たされ、他と共生することを目指す交流活動として捉えることができた。

活動の中では、学生のいろいろな行動を観察することができた。自分達の持っているパーツだけでは顔が完成できないとわかった時に、積極的に他のグループに働きかけて必要なものを得るように自ら動き、お互いがうまくいくように協力する姿が見られる。それに対して、何も働きかけず、ひたすら他のグループが働きかけてくれるのを待っているグループもある。普段から仲の良い学生たちの場合、時には他グループに無許可で勝手に持って行ってしまい、言い争いが起こることもある。また、自分達が完成したら他のまだ完成していないグループの手助けをしている場合もあるなど、さまざまな様子が見受けられる。また、同じグループ内においても、積極的に行動できる学生とそうでない学生がいたりする。自分のグループに与えられたパーツの数が他に比べて少ないことに文句を言う学生も見受けられる。

このように英語を使いながら体験的な活動を通して、学生が実際に感じたこと—フラストレーション、嫉妬、所有感、分かち合ったときの感じ、あるいは完成させたときの気持ちなど—を実感することは、助け合うことの大切さを学び、意思の疎通を図るコミュニケーション能力を高め、自国の利益のみにとらわれずグローバルな視点を持つことや共生の認識をもつことにつながる。

活動例2において学生はかなりの数のみかんがあったとしても、その中から自分のみかんを容易に見つけることができた。毎年、大学生や教員免許更新講習の参加者を対象にしてこの活動を行うが、30~40人という多人数でもそれぞれが自分のみかんを見つけることができています。

学生はこの活動を通して「見た目は同じでも、ひとつひとつ（一人ひとり）を知ってみると、それら（彼ら）はみんな異なっているものだ」ということを実感し、それは「それら（彼ら）はみんな同じではないかというステレオタイプの偏見を克服すること」につながるということを理解する。また、人々を「個人として知るようになるため」には、その人をよく知るために「十分に時間をかけること」が必要であり、わずかな情報や経験から大胆な決めつけを行うことの愚かしさと危険性を認識することが重要であるということに実体験を通して気付くことができる。これらの活動は小学校中学年から大人に至るまで実施可能である。

V. まとめ

国際化に伴い、今後ますます国境を越えた人の移動が予想される中、私たち日本人は自分の意志にかかわらず、母語以外の言語や異文化に遭遇し、新しい環境に適応しようと試みながら、その難しさを実感し、何とかその困難を乗り越えていけなければならない。どんな状況に置かれようとも、周りの人々と積極的にコミュニケーションを図り、融合していく術を身に付け、異なる環境に容易に適応できる力を持ち合わせていれば怖いものはない。英語というコミュニケーションを図るためのスキルを身に付けることは重要であるが、それより以前に、文化背景の異なる人への開かれた心と態度、そしてコミュニケーション活動への積極的な参加行動が基礎となることを忘れてはならない。いくら英語が堪能でも、

人とかかわることに後ろ向きでは意味がないのである。

外国人に限らず、身近な人たちとのコミュニケーションを図ることに臆病では何も始まらない。自分とは違う、異質な立場を受け入れ、思いやりのある生活スタイルの習得を目指すことが重要である。交流する中で、自分との違いを認めながら互いに尊重しあう態度が生まれ、それが国際理解につながる。人種や生活様式への誤解や差別感情を排除しながら、同じ人間としての交流をどう図れるかは、実体験の中でこそ育まれると考える。

国際理解教育というと難しく考えがちであるが、実際は環境・人口・戦争など現代社会の中で日々起こっている様々な問題に対応できる児童・生徒・学生を育てるという社会派的な問題解決型アプローチと、地球上の人類の多様性を認め、その相互理解を深めようという文化理解的アプローチという2つの立場があり、英語教育は文化理解的アプローチの立場にあるといえる¹¹⁾。英語教育の最終目標は、文化の異なる人と主体的にコミュニケーションを図ることができるという能力を伸ばすことであり、教師の役割はそのための活動や教材を準備し、適切な指導を行うことにある。それは、ただ単に英語圏文化の情報を与えて済むものではなく、異文化間コミュニケーションに必要な、知識、理解、コミュニケーション技能の育成をめざす教育でなければならない。つまり、国際理解教育の視点から英語教育をとらえ直すことが求められているのである。教科化を前に様々な問題が山積しているが、英語活動を行う際の国際理解教育はコミュニケーション能力の育成という目標とうまくバランスを取りながら進める配慮が必要と考える。

引用文献

- 1) 文部科学省 HP http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/... index.htm 不登校に関する調査研究協力者会議(2016)：不登校児童生徒への支援に関する最終報告
- 2) 一般社団法人 日本経済団体連合会 HP http://keidanren.or.jp/policy/2016/108_gaiyo.pdf (2016)：2016年度新卒採用に関するアンケート調査
- 3) 文部科学省 HP http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/.../1343704_01.pdf (2013)：グローバル化に対応した英語教育改革計画について
- 4) 石坂和夫 (1994)：「国際理解教育事典」，創友社，東京，146-150.
- 5) 八代京子 (2003)：「異文化コミュニケーションワークブック」，三修社，東京，29-30.
- 6) 八代京子 (2003)：「異文化トレーニング」，三修社，東京，122.
- 7) 高橋美由紀・柳義和編著 (2011)：「新しい小学校英語科教育法」，協同出版，東京，9-10.
- 8) 松川禮子 (2003)：「小学校英語活動を創る」，高陵社書店，東京，18-19.
- 9) 中川喜代子 (2000)：「地球市民を育む学習」，明石書店，東京，230-231.
- 10) 中川喜代子 (2000)：「人権学習ブックレット④寛容性」，明石書店，東京，69-70.
- 11) 佐野正之・水落一朗・鈴木龍一 (1995)：「異文化理解のストラテジー」，大修館書店，東京，31-32.